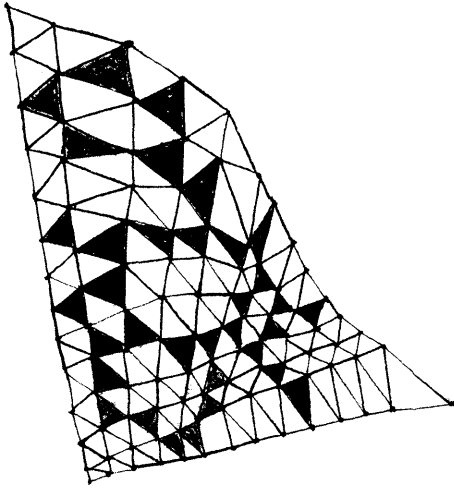


S F 的読み解き

子どもという風景



第二十六回 「正」の万華鏡

堀内 守

正の字

「正の字」は、子どもの世界に無理なく入ってくる。ある年齢に達すると、その字はふつうに出会う模様に思えてくる。形は四角いし、線の並び方も規則的だ。横から眺めても、上から眺めても、よく似た形に見えるし、短かい棒を並べると、偶然「正」に近い形になったりする

る。

友だちの名前にも「正」の字がある。ある子は「正ちゃん」であり、他の子は「正ちゃん」であるかもしれない。同じ字なのに、一方は「ショウ」と読ませ、他方は「マサ」と読ませる。ふしぎである。

姓の方にも「正」はたくさんある。地名にも、屋号にも「正」がある。商品名にも「正」がある。

これらのつながりを手繰り寄せるのは子どもにとっては遊びに近い。

友だちの名前に「正」はいろいろな形をとって現われてくる。「ショウ」「マサ」はもちろんのこと、時には「タダシ」、時には「タダス」、さらに「セイ」などと変わることもあるからだ。

本当に「正ちゃん」という主人公は多い。絵本においても、マンガにおいても「正ちゃん」は、次々と現われ、やがて消えていく。そしてまた現われ続けている。

正月

子どもの観念には、「正月」はひとつのときめきともにもあらわれる。それは、「正」と「月」というように区分されない。まずもって、「正月」というときめきがあった。そのときめきが「ショウガツ」なのである。

待っている。待つことも、「ショウガツ」のイメージをふくらませる。何やらあらたまった雰囲気があり、変化があり、浮き浮きする。「正月」の「正」と、「正ちゃん」の「正」はなかなか結びつかないでいる。「正月」はみんなのものである。が、「正ちゃん」はひとりである。「正月」を「正ちゃん」に独り占めさせるなんて、というような疑問も湧く。が、子どもはそれをあえて口に出さないだろう。口に出したとたん、何かがぐずれてしまうような気がする。いぶかりながら、黙っている。「正」の字がいろいろな文字と結びつくのはずっと先になる。まずは、ときめきがあったり、具体的な友の名だったりするあたりでただよっているのである。

正直

「正」の字が子どもの生活経験を揺るがしはじめるのは、それが大人の側からのきつい要求を引き連れて現れはじめるときだろう。「正直」「正座」などがそうである。

「正直」は、「正直であれ」という形だけで現われることはないだろう。まずもって、正直でない事態が生じてしまい、それに対して大人の側から「正直でなくてはいけない」という叱り、説諭などとして現れるときである。ふだんとは違った雰囲気「正直」にはつきまとう。イミは「ウソの反対」ていどにしかわからない。にもかかわらず、尋常でない雰囲気の中で「ショウジキ」が繰り返されていく。

「正座」は、家の構造的変化とともに変わったが、行儀正しくすわるということの意味は保持し続けている。身を正しく保つということは決して楽ではない。場に馴れることも必要だが、訓練も必要になる。このあたり、子どもにとっては実にふしぎな姿勢に見えることもある。無

理で、ぎこちないからだ。

「正直は一生の宝」という諺があり、他方には「正直過ぎる」というような表現もあるから、「正直一筋」にはいかない面もある。子どもだって、この機微を承知している。つまり、一方の極に「正直」があり、他の極に「嘘」があるという見方は、子どもにとっては無理なモノサシなのである。こんなにスッキリとまっ二つに分けられるものなら事はんたんだが、そうは問屋が卸さない。

子どもの日常場面では意図せずともウソは結果として生まれざるをえない。ウソをつくつもりでないのに、大人の目にはウソのように見えることもある。表現が不十分であるため、または表現が誇大に見えるためだろうか。ある年齢に達するまでは、これらも大人の目には「かわいい」ことのように見えたこともあったはずである。それなのに、少しずつ事態は変わっていき、同じ行為が「正直」というモノサシで説諭を引き出すことになったりする。

にこにこ笑って見ていた大人たちも、かつてはそのことを叱ったりはしなかった。ところが、ある段階から事態は変わる。「正直であれ」と期待され、その期待に応じないと、非難を受け、ペナルティを課せられるようになるのだ。

この辺の機微は、通常、当の子ども自身にも記憶されてはいない。大半は忘れ去られてしまう。まれに、印象が強烈だったせいも、記憶に残っているというような場合もある。「聞きわけ」の良さ悪さが前面に出てくるのである。

正しい

同じ頃、「正」は少し伸びた表現に変わっていく。「正しい」という形容詞が「いい」という広汎な価値表現のなかに繰り込まれていく。流動的な世界だ。

素朴な「いいかい」「いいよ」からはじまって、概念としては「正邪」や「正否」の方に「正」が束ねられていく。

日常、あらゆる場面で、相手の許可を得る表現であるところの「もういい？」からはじまり、「もういいよ」に至る質問には、相手の「顔色を読む」ことが先行している。たぶん「もういいと言ってくるだろう」というぐあいに頃合いを「見はからって」から、「もういいかい？」と念を押す、というのがホントのところであろう。「まだ、いけない」という答えを予想していない。

牧歌的なまでに意味の広いのが「いい子」であろう。これは「正しい」とくらべると、はるかに広い。「いい子」や「よい子」の「いい」や「よい」は、ある具体的な「子」をとらえてはいない。その子のある行為、あるいは雰囲気指しており、さらに事実とは切り離されたお世辞やサービスという面も含むからである。

「いい子」や「よい子」は、そういうバランスの保ち方によりイミを幾通りにも変えはじめる。「もういい？」などの「いい」と違って、「いい子」の「いい」は、場合によっては清濁を合わせてしまう。「おりこうちゃん」にはあと一歩である。

答えが「正しい」というような場面は、人工的な場面において生ずる。「どちらが正しい？」とか「正しいものを一つ言え」などという問いが答えをつくり出す。

「正しい」とは、ほめられたり、丸をもらったりすることと交換され、拍手や賞賛とともに方向づけがなされていく。つまり、「正しい」とは、これらのくり返しのなかで、しだいにある方向にチャンネルをつけていく。

いじわる

古典的な物語のなかでは、「正直」と対になっていたのは「嘘」よりも「いじわる」の方だった。「正直じいさん」対「いじわるじいさん」、あるいは「正直じいさん」対「いじわるばあさん」という対比は示唆的である。

正直じいさんといじわるじいさんとは何から何まで対照的かという点、そうではない。いちばん説明がなされていないのは、両者が隣り合って住んでいるという理由である。

もし、そうであるならば、「いじわるじいさん」の方が「正直じいさん」をいじめ抜き、「正直じいさん」は、その地に居られなくなるというようなことも起こりうるのだが、物語ではそんなことはない。他方、「正直じいさん」の方は、あくまで寛容である。

花咲かじいだの、おむすびころりんだの、よく似た構造をもっている。「いじわるじいさん」は、「正直じいさん」を照らし出す光のような役割、背景の役割、ひき立て役等々である。

花咲じいこの物語では「いじわるじいさん」は、犬を借りにきたり、臼を借りにきたりする。そのたびに、正直じいさんの方はこころよく貸してやる。そのたびに悲しい目に合うのだ。このあたり、子どもにとっても納得のいかない場合も生じるのではないか。「どこまで人がよいのか」とか、「だまされるぞ」などと、応援したりする子も出てくる。もっと醒めた子は、「正直じいさん」のお人好しなことにいら立ったりする。

正方形

「正」という字は、形から見ると四角く見えた。四角という形のなかで、ある形のことを子どもは「ま四角」と呼ぶ。これも体験的に生まれてきた名前だ。気がついてみたら、その形のことを「ま四角」と呼んでいたというのが正直なところであろう。

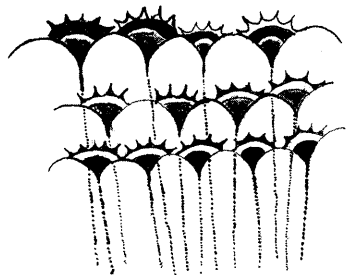
ところが、同じ名前のものをこんどは「正方形」というように、あらためて呼び直さなければならなくなる。これは算数における約束事である。算数を字ばなくとも、この形を「ま四角」と呼んでいた段階から「正方

形」と呼ぶようになる時期がやってくる。

これは「正」が「しょう」でも、「まさ」でもなく、「せい」であることの確認の第一歩のようなものだ。

経験的にもわかることだが、「正」にまつわる熟語のなかでは「せい」と読ませるものが圧倒的である。正史、正文、正庁、正堂堂、正気、正色、正字、正当、正名、正攻法、正邪、正宗、正法等々。

「ま四角」は、日常用語。「正方形」は、それから先に開けていく約束事の世界を暗示する術語。



「正」と5

「正」の字画が5であることから、「正」の字は、開票の際に効力を発揮する。和算の算木に似て、「正」の字はいろいろなところで5を表示する記号として使われているのである。「正」がいくつも並ぶ。途中で開票が終わりになれば、「正」の字は完成しなのまま残される。

開票をする場合、記録者は大体上方から「正」の字を書きはじめ、だんだんと下方に書き加えていく。だから、途中で開票が終わったりすると、いくつもの「正」の字が塔のように並んでいるのに、土台の方の「正」の字は未完成だったりすることもある。

「正」^{ただし}くんが立候補したとする。その開票の際には黒板上で名前の部分と票数の部分は色チョークで区分しなければならぬが、それにしても錯覚を起こしかねない。

選挙は、子どもの世界においてもよく行われる。その選挙は「正大」でなければならぬ。「正堂堂」は、今では「選手宣誓」の場面でよく使われることばになったが、それは「正政法」をとること、「正規」にしたが

うこと、「正道」を「正義」をもって、「公正」に行くことを誓うことばでもある。

ところが、これらはよく使われる割には概念はピタリときまらない。表現は大仰なのに、イミの方は割に空疎なのである。

「正堂堂」は、もともと隊列の勢いが盛んなさまを指すことばであった。そこから転じて、正面から悪びれずに事に当たるさまを指すようになり、態度や手段が正しくて立派なさまを指すようになったといわれている。

正三角形

「正方形」よりも、「正三角形」の方が抽象的思考に導く手段として使われる。正八面体、正二十面体などは高度な知識に連れていく。子どもは、「正門」は体験的に学ぶが、「正角形」以下は図形として定理を介して学ぶ。

それは「正・反」に通じ、「正・負」に通ずる理論体系の入口あたりに位置づくだろう。

本当は「正義」などという概念は抽象的で、わかりに

くいはずである。ところが、「正義の味方」のイメージは、今日でも量産されているから、それを介して正邪も正否も体感されていく。

「正義の味方」のイメージがつくられ、子どものファンをひきつけるようになるまでには、多くの邪神、魔神、怪人、怪物が「悪」の姿をとって現われ、「正義の味方」をひき立てている。

正調

一方、「正統」とか「正調」とか「正則」などのように、たえず他と自らを区分することをもって自分ののはたらしきとしているようなことばもある。

これらは、一見子どもの生活とは関係がないように見えようが、その概念を知らずとも、子どもはちゃんとこれらを演じ分けている。

端的に言えば、「正副」は、子どもにとっては身近なものである。モノやこととして身近にあるばかりではなく、これらの規準が身近にある。「これはいちばん大事

なもの」「その次がこれ」というように、「正副」は価値の上で区分されている。

「正調」は、多くの変調のなかから抽出されてきたものことである。自然発生的な場合もあるが、大方は「正調」と認められてはじめてそれを名乗ることができる。

こんなわけで、「正」の字には、ただすとか、まっすぐというようなイミがあることがわかってくる。「正」の字は、もともとは「まっすぐに歩く」意味から出発した。本来のあらたまった、正式の……というような意味はそのことから派生したわけである。

「まさ」の風景

「正」は「まさ」の一族を引き連れている。「まさに」「まさしく」などからもわかるように、たしかで、分明で、確実で……というような意味をもっている。「正土」は、床の間四壁などに塗る上等の土であるし、「正目」といえば、縦にまっすぐに通った木目のことである。

正清、正恒、正秀、正宗は、いずれも有名な刀工の名前であるが、本名というよりは、職業の格を示す名前である。だから「正」がついているのであろう。正宗は、また酒の銘柄の名前であり、酒の代名詞になることもある。

これらのことは、まさに「まさ」が「正」よりも古層にあることを暗示している。そのせいか、「正」という漢字の輸入以前の「まさ」の頻用の度合いは大きく、やたらに「まさに」を連発する人もいる。子どもにとつては、連発できるほど「まさに」は身近なことではなないが、これに応ずるのはたぶん「ホント」なのではなからうか。

ウソーホントという対比の「ホント」よりも広く、「ホント」が発せられると、つきつきとことばが続いて紡ぎ出されてくる。そういう導き手の役割をつとめるのが「ホント」なのだろう。

分配

アリストテレスによると、「正義」は結局は「配分」に帰着するという。何やらけつたいな結論のようで、高貴なはずのものが突然何かを分け合っているような光景に転じてしまったように見える。だが、まさにここがポイントなのである。ホントにそうだ。

まず身近なところから考えてみるとよい。「オーライ」「オーケー」「よし」などは、日常気軽に使われている。軽快に。ところが、これらを文脈で分けてみると、「万事好都合」とか「万事快調」とか「健康である」というように、つづがなくすべてがそのところを得ていることを示しはじめる。

「オーライ」は「オール・ライト」、つまり「よろしい」を意味する。子どもの生活では「いいよ」とか「ホントだよ」に当たる。

ある体制が順調であり、ある状況が順調であれば、そのことばが生きている。ところが、少しでもこの調子がおかしくなると、「だめ」「いや」が生まれる。まことに変転はげしいのである。

アリストテレスのいう「配分」は、このバランスのきわどいことを示唆しているし、万事快調のときは「すべて事もなし」という状態であることを示唆している。英語などでは、ふつうは「ライト」と呼ばれているものもろのことながら、少しあらたまると、ラテン語系統の「ジャスティス」に切り換えられる。

つまり「正義」である。「ライト」よりも抽象的になる。日本語風にいえば、「正しさ」に近づく。この「ジャスティス」は、ヨーロッパでは女神として彫刻や絵画に表現されているから面白い。のみならず、この女神は体軀は堂々たるもので、女丈夫のイメージがある。

よく見ると、目隠しをしており、左手に剣をもち、右手に秤はかりをもって高くさしあげている。「正義」は、エロヒキをきらう。まずもって、「公平」さを示すため、目隠しをして、秤を高く掲げたのであろう。剣は邪よこしましまたな判断を斬るためにもっていると思えば辻つまが合う。

秤や剣などの持ち物よりも、この女神のすつくと立った姿はまさに正正堂堂たるものがあり、みごとなくら

い。

子どもの世界では「分配」は、まことにふしぎなくらい多様な現われ方をする。「分化」「分科」「分割」「分轄」「分光」「分合」「分散」「分冊」「分室」「分掌」「分乘」「分身」「分析」「分節」「分隊」「分担」「分団」「分段」「分捕る」「分秒」「分別」「分明」「分野」「分離」「分立」「分力」「分類」「分列」「分裂」などなど。

「正義」は、そういうなかに具体的な姿を現わす。もし現代における「正義」の女神を形象化したら、どんな姿で、何を持っている形で表わされるだろうか。

(名古屋大学)